

●暑い。毎日く暑い。この校正の提出日八月十五日は私の入院予定日。入院といっても、白内障の手術の為。私自身の意志とは言い難い成行きた。老いの結果か。

とよださなえ

## 猫の存在

倉庫の屋根の上に

猫が一匹

赤い月を

背負ったまま

じっとしている

運河の漂いに

鈍重な倉庫の

壁が

映っている

月も

映っている

猫は

さざ波に

消されてしまった

(一九五八)

## 蚊と蠅

ブーンと音がし

耳元をねらって

旋回している

この音は縞蚊だ

電気をつけ

私は起き上がった

目が慣れないで

蚊の姿を見失った

小さな部屋だと常日頃

不満を持っているのに

蚊の姿が見つからない

カーテンのひだ

本棚の影

ぶら下がっている洋服

蚊の大きさからすると  
身を隠すには  
便利なものばかり  
片付け下手な私をからかっているのか

壁に寄りかかり  
空気を動かさず  
じっと待った  
蚊がやってきた  
私が空けてあげた  
空間で  
勇壮に飛ぶ姿は  
大舞台でのはなやかな舞のようだ  
しかし 私も  
蚊を殺すタイミングを計っていた  
パシン  
手の掌の中の  
小さな黒い点

アフガニスタンとの国境付近の  
パキスタンの小学校  
年老いた男の先生が  
地べたにぎっしり座っている  
男女の子供たちに  
言い聞かせている  
“アフガニスタンに戻ったら  
あなたたちはもっと狭いところに住むことになる  
せまいせまいと感じた  
その時  
あなたたちは目をつむって  
自分は蟻なのだと思いなさい  
そうすると  
そこが広いと思うことが出来るよ。  
静かに語る教師と  
うなずいていた子供たち  
イラン映画の一こまだった

(06・11・20)

草の名前

すずめのキャタピラの  
名を知って  
眺めつつ  
名づけた人の  
思いがどこにあったのかを想う  
すずめの鉄砲  
のみのふすま  
風雅な名前

雑草と言う言葉を  
使いたくない  
知らないことを棚に上げて  
個々に生きている草々を  
雑草と束ねる言い方は  
傲慢だ  
名も知れぬ花と言う呼び方も  
文語調を装い  
己の無知を隠している

小学生だった娘の  
植物採集で調べて知った名は  
ごみための野菊と  
野ぼろ菊  
何とか間に合わせた  
夏休みの宿題に  
見合ってしまった名か

尾瀬に行って  
教えてもらった  
小さくて可愛い花なのに  
何だかきたない可哀想な名前  
何っていったかな？  
甥が尋ねてきた  
へくそかずら？  
そうそうその名でした

昔 いぬふぐりのうたを  
歌っていた女学生の私に  
父は

ふぐりの意味を知っているのかと  
声をかけてきた  
青い小花として不可分の  
一語だった  
別な名前でも良かったろうにと  
父がつぶやいた

夏草の茂みの前で  
姉の友人が  
指した花  
名前を言いたくないのよね  
白い小花が草叢を縁どり  
その葉の下に見える  
棘だらけの蔓  
二人で何かに許しを乞うように  
口にした  
ママコノシリヌグイ

( 0 6 · 1 1 · 2 8 )

## エッセイ：デイサービスへ

ママは介護一で、デイ・サービスに通うようになったよ。ある日 突然、娘が言った。パパは要支援一なの。夫九十才、私八三才で外見的にも色々劣えを見ていたのだろう。住んでいるマンションが半年に渡る耐震工事があった為、住んでいる人間、両親の具体的な世話に想いをはせてくれたのだろう。それが介護の申し込みで、大分苦労したらしい。そんな気配を感じさせず、ヘルパーさんが週三回、お弁当が同じく三回来る手続きも済ませていた。何の相談もなく、娘の独断の働きで、一応これ迄、主婦である意識はあったので、我ながらとまどった。この数年全身の色々な不調、ころんと骨を痛めている。

娘がやってくれたことは、私の実状に対する気遣いで、それを自分でする能力が皆無であることは自覚したというより、自覚せざるを得なかった。私は“出来の悪いロボット”と自分に名付けた。

昨年十一月十九日金曜日がはじめて、デイ・サービスに出掛けた日だ。午後一時二十三分、スタッフの男性が迎えに来た。新人として挨拶のあと、慣れた動きで、隣の棟の家のベルを押していた。番号は410、我が家は412だが出てきた男性の顔ははじめて見る顔だった。黙っておじぎをした。スタッフが男性がマスクを付けていないことを云うと、エレベーターの中で、ポケットをまさぐった後、忘れましたといった。静かに新しいのを上げますから心配しなくていいですよ。マンションの前に停めてあった中型の白いバスに乗った。平山さんは二番目に宮田さんは三番目に座ってと云いシートベルトを止め、おでこで体温もはかった。一番前の座席に一人の女性、一番後ろの席には三人の女性が乗って

いた。話し声は聞こえてこなかった。スタッフは運転台に乗りながら、車の流れを計っていた。三鷹警察署の前なので、車が多い。車は大通りから右に曲がり、住宅地の中に入り、子供の為の公園を二つ、畑のブロックを抜け又住宅地に入った。ある家の前で止まった。肥った女性は、付き添った男性とスタッフが腰を押し、手を引きなんとか座席につかせた。一番前の通路側の席。彼女が最後の乗者だった。そして人見街道に面する文久堂デイサービスの建物に着いた。自分で動ける人から下車するのだが、女性三人は夫々杖を待っていた。女性のスタッフ二人が軽ろやかに動きまわっている。マスクのせいもあり、私には年令の見当もつかない。一列目に座っていた二人が降りてきた。自力で歩けるように工夫されている二種類の歩行器に身体を預け、自分の名前が記されている場所を見つけそこに座る。二十席が二列のテーブルに用意されていた。

十七人中男性は五人。皆マスクをして、きちんと座っている。歩行機も杖も関係ない。ほうじ茶をいただく時、一寸顔が見える。老人の集団であると実感。半分に別れて七種類の機械、マシーン運動と脳トレ。漢字を使ったり、数字を使ったり、絵を使っての、頭を使って遊ぶ。二文字の漢字を組み合せ、四文字の熟語を作ったり、今日はどんなのが出てくるのがと楽しみだ。全て、年長の女性スタッフの創作とのこと。拍手。

色々な人々が、有意義な半日を過ごせるように、工夫をし、スタッフの方々のやさしい気遣いには、何気ない顔をしながらなので、気持が良い。感謝するばかりだ。多謝